

## 種豚の血清を用いたブルセラ症の試験管凝集反応試験 及び補体結合反応試験

三浦達弥<sup>1)</sup> 古屋裕崇<sup>2)</sup> 高安真理子<sup>1)</sup> 星野尾歌織<sup>3)</sup> 上野勇一<sup>3)†</sup>

1) 茨城県北家畜保健衛生所 (〒310-0002 水戸市中河内町 966-1)

2) 群馬県家畜衛生研究所 (〒371-0103 前橋市富士見町小暮 2425-3)

3) 国研農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究部門 (〒305-0856 つくば市観音台 3-1-5)



本文はこちら

(2022年5月24日受付・2022年6月10日受理・2022年7月14日公開)

### 要 約

国内の豚のブルセラ症の抗体検査は、2022年度から試験管凝集反応試験及び補体結合反応試験により実施されている。しかし、国内では両試験の実施実績が少なく、結果判定の妨げとなる非特異反応や抗補体作用に関する情報がなかった。本試験では、これらの情報を得るため、家畜改良増殖法に基づく豚の種畜検査の余剰血清を用いて両試験を実施した。試験管凝集反応試験では、32/109 (29.4%) の血清で非特異反応と考えられる凝集が認められ、そのうち2血清が疑反応と判定された (特異度 98.2%)。補体結合反応試験では 8/92 (8.7%) の血清で抗補体作用と考えられる溶血阻止が認められ、そのうち 5 血清が陰性でないと判定された (特異度 94.6%)。今回の試験結果は、今後国内で両試験によりブルセラ症の抗体検査を実施していくうえで参考となる。

——キーワード：抗補体作用，補体結合反応試験，非特異反応，豚のブルセラ症，試験管凝集反応試験。

-----日獣会誌 75, e150～e156 (2022)